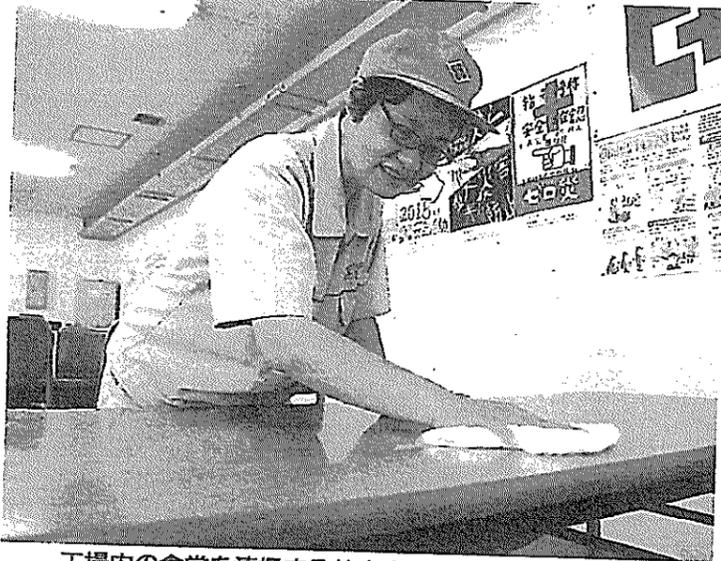


共生が生かす 障害者の力

先進地 滋賀・信楽から



工場内の食堂を清掃する鈴木さん。「いまの仕事に満足している」と話す(甲賀市信楽町江田)

窯業長年支え 苦境にも新たな広がり

働く意欲のある障害者と伝統産業を橋渡しする試みが、京都で動き始めた。成功の鍵はどこにあるのか。甲賀市信楽町では半世紀以上たわたり、知的障害者が信楽焼の担い手を務め、業界の発展を支えてきた。しかし、近年は窯業の不振で働く場が激減。先進地の「いま」を取材として見えてくるのは、地域とのつながりの重要性だ。



信楽で障害者雇用を推し進めたのは故池田太郎さん(1908、87年)。「障害者福祉の父」と呼ばれた系賀一雄さんと近江学園を創設した。53年に全寮制の職業訓練施設「信楽学園」を設立。障害者を「保護すべき対象」とする考え方が主流だった当時、池田さんは障害者の自立を掲げ、窯元への就労を促進した。

しかし、信楽焼の需要低下に伴い窯元の数が激減。ピーク時の97年に145人いた障害者就労者は今年、15人にまで減った。

新たな就労先を探そうと、信楽学園の職員は今、地元企業と折衝を続ける。園生の窯元での働きぶりをアピールし、受け入れに理解を求める。現在は、就労前の実習先として14事業所を確保。このうち6事業所は、スーパーや牧場、弁当製造工場など窯元以外の職場だ。

「きちんと仕事ができるようになりたい」と笑顔を見せる。同社では、他に3人の障害者が清掃員として勤務する。

窯業の不振は、人口流出など地域の空洞化を招き、商店街ではシャッターを閉める店舗も目立ってきた。障害者と住民が交流を深める機会が減りつつある中、信楽青年寮は昨年度から、寮生と住民が一緒に作業を楽しむワークショップを催している。週1回、寮職員が地元の子どもに勉強を教える学習支援にも取り組む。上田施設長は「障害があってもなくても、性別や年齢にかかわらず、互いに支え合い、誰もが安心して暮らせる町づくりのお手伝いをしたい」と語る。(田代真也)

就労機会安定へ 行政・企業協力を

龍谷大 村井龍治教授



伝統産業の現場と障害者をつなげる自治体の取り組みについて、障害者福祉に詳しい龍谷大の村井龍治教授に聞いた。

「京都市の試みをどう評価する。障害を『人の特性』と捉えたことも良い取り組みだと思う。障害者の活躍の場が広がり、安定した生活にもつながる。伝統産業以外の

業界でも、障害者の特性に目を向けるきっかけになるだろう。

課題はあるか。

人手が足りないから障害者を雇うという意識のままでは、就労機会の安定的な確保にはつながらない。障害者を雇用するには、職場のバリアフリー化を進めたり、個別のマニュアルを作ったりと、さまざまな面でコストが必要となる。行政と企業が協力して、こうした課題を克服していくことが大事だ。

展望は。

伝統産業そのものが衰退傾向にあり、障害者雇用を継続できるかという点で将来的な不安も残る。特定の業界だけでなく、社会全体で、粘り強く取り組んでいかなければならない。(聞き手・辻孝典)